◉序言◉

パブリック・ヒストリー
――現代社会において歴史学が向かうひとつの方向性

菅　豊

本や史料がうずたかく積まれた、大学の薄暗い研究室。郷愁をそそる古書の匂いに包まれたその狭い部屋に一日中閉じ籠もり、その片隅で時の経つのを忘れて文献を読み漁り、過去の出来事に思いを馳せて、論文や本の原稿を書き上げる歴史家。そんなストイックな歴史家像が、極めて古めかしい紋切り型のイメージではあることは間違いない。ただ、そのようなイメージが、アカデミックな世界の「正統」な歴史学の担い手たちには、いまだ少なからずこびりついているのではなかろうか。

パブリック・ヒストリーの世界では、アカデミックな世界と比べ、もっと多種多様な歴史学の担い手像が浮かび上がる。パブリック・ヒストリーとは、狭義には歴史学の分野で何らかの訓練を受けた人びとが、大学の研究室や教室といった専門的で学術的な場の「外」の社会へと飛び出して、そこで歴史学の知見や技能、そして思想を活かす幅広い実践を意味する。それは博物館や文書館、史跡、歴史公園といった場での歴史保全や展示から、学校での歴史教材の制作、映画やテレビ会社での歴史ドラマやゲー

ム業界での歴史シミュレーションゲームの制作、さらに法廷における先住民の権利訴訟での資料提供、自分が住むコミュニティーの歴史や家族史の探索、ルーツ探し……等々、実に多彩な現場で執り行われている活動である。それらの活動の目的は営利、非営利を問わない［菅二〇一三：一五八―一六〇］。

そのようなパブリック・ヒストリーの現場では、歴史の専門家とともに、歴史学の専門教育をとくに受けていない大多数の普通の市民も、歴史を取り巻く活動、すなわち歴史実践に一緒に携わっている。パブリック・ヒストリーを広義にとらえるならば、そのような歴史実践に関わる一般の市民は、パブリック・ヒストリーの受け手であるとともに、パブリック・ヒストリーの重要な作り手、あるいは送り手でもあるのだ。

一九六〇年代、「歴史とは何か？（What is History?）」を問うたエドワード・ハレット・カー（Edward Hallett Carr）は、アメリカの歴史家カール・ベッカーの「歴史上の事実というものは、歴史家がこれを創造するまでは、どの歴史家にとっても存在するものではない」という刺激的な言葉や、イギリスの政治学者マイケル・オークショットの「歴史とは歴史家の経験である。これは歴史家だけが『作った』もの」とする急進的な言葉を受けて、「歴史家が歴史を作る」という至極道理に適った命題を提示した［カー 一九六二：二四―二七］。ただ一方で彼は、その歴史を作る主体である「歴史家とは誰か？（Who is the Historian?）」という問いに関しては、深く考えをめぐらしてはいなかったようである。カーは、「歴史を研究するためには、まず歴史家を研究せよ」と述べたが、彼が実際に取り上げた歴史家のほとんどは、歴史の知識のみならず、さらに哲学的な思考や思索、議論にも耐える教養を身につけて「歴史を作る」ことができた、大きな存在であった。

そのような時代、歴史を作る行為は、専門的な歴史家だけが行うものと考えられていた。また、そのような時代、歴史を考える行為は、大学といったアカデミックな空間に閉じ込められていた。しかし二〇世紀末、象牙の塔に閉じ込められた歴史学を多様な人びとに開き、また多様な場に開こうとする試みが、欧米を中心に始められた。そして、その動きはいまや世界中に広がっており、歴史学の大きな潮流のひとつとなりつつある。それは、現代社会のなかで歴史学が、その存在のあり方を問い直す再帰的な営為でもある。本書は、そのようなパブリック・ヒストリーの可能性を、日本の歴史を取り巻く世界で思考、思索するために編まれた。

パブリック・ヒストリーとは、歴史学の新しい研究分野や対象、方法を指し示すというよりも、現代社会のなかで歴史学が向かうべき、ひとつの新しい方向性を指し示すものと考えた方が良い。もちろん、学問の方向性が変われば、それに見合った新しい分野や対象、方法の考究は必要だが、やはりパブリック・ヒストリーの主眼は、歴史学を新しい方向に向かわせることにこそある。

パブリック・ヒストリーを展開するにあたって、歴史学でこれまでなされてきた古代史、中世史、近世史、近代史、現代史などといった時代区分や、政治史、経済史、社会史、文化史などといった対象区分、そして日本史、東洋史、西洋史などといった地域区分は、あまり大きな意味をもたない。それは時代、対象、地域の壁を乗り越える歴史学の営為である。どんなに古い過去の歴史であろうと、またどんなに遠くの場所の歴史であろうと、その歴史が〈いま、ここ〉に生きる人びとにとって重要な意味をもっていれば、パブリック・ヒストリーの課題となり得るのである。パブリック・ヒストリーとは、過去を過去のこととして過去に留め置くのではなく、過去と現在との終わることのない対話を通じて、過

去を現在に関わるものとして現在に引き戻して、さらにこれからの未来に引き伸ばして、人びとのために役立てる「現在史」なのである。

「パブリック・ヒストリーとは何か」ということについては、このあと本書で詳らかにされるので、ここでは屋上屋を架すことは控えておこう。ただ、現在のパブリック・ヒストリー研究における関心事を若干なりとも知るために、パブリック・ヒストリーの基本図書の目次を一瞥しておきたい。次に紹介するのは二〇一七年に、イギリスのオックスフォード大学出版社から刊行されたパブリック・ヒストリーの入門書として定評のある『オックスフォード・ハンドブック　オブ　パブリック・ヒストリー（*The Oxford Handbook of Public History*）』（ジェームス・ガードナー、ポーラ・ハミルトン編）の目次である。そこで議論されている内容は、実に多彩だ。

パートⅠ　変化するパブリック・ヒストリーの風景

一　パブリック・ヒストリーの国際化

二　複雑性と協働：デジタル環境でパブリック・ヒストリーを行うこと

パートⅡ　パブリック・ヒストリーをする　Doing Public History

三　脱中心化する文化：パブリック・ヒストリーとコミュニティー

四　トレーディング・ゾーン：障害者の歴史における協働事業

五　過去に関する大衆的理解：グラフィック小説を通じた歴史解釈

六　歴史のビジネス：顧客、専門家、そしてお金

パートⅢ　パブリック・ヒストリーの境界を押し広げる

七　人権のためのパブリック・ヒストリー：良心の場所とグアンタナモの公共的記憶プロジェクト

八　正義のためのアーカイブ、正義のアーカイブ

九　セクシュアリティと都市：クィア（性的少数者）のパブリック・ヒストリーの政治と学際性

一〇　パブリック・ヒストリーと環境

一一　環境債務（環境対策に必要な費用）からコミュニティーの資産へ：パブリック・ヒストリー、コミュニティー、そして環境再生

一二　過去になることと現在的な思考のあいだ：パブリック・ヒストリーと地方食の行動主義

パートⅣ　パブリック・ヒストリーと国家

一三　国連制度における歴史家とパブリック・ヒストリー

一四　政府の仕事としては十分だ

一五　制度的な記憶の形成：連邦議会のパブリック・ヒストリー

一六　歴史、遺産、そしてエスニック・ダイバーシティの表象：中国の文化観光

一七　パブリック・ヒストリー、文化機関、国家アイデンティティー：差異性に関する対話

パートⅤ　パブリック・ヒストリーのなかの物語と声

一八　歴史博物館とアイデンティティー：陳列室で「彼ら／彼女ら」「私」そして「私たち」を見つけること

一九　国立博物館、国家の物語、アイデンティティーの政治

二〇　記念博物館における喪失の個人化

二一　マグナカルタ：パブリック・ヒストリーの八〇〇年
二二　知識の社会形態としてのパブリック・ヒストリー
二三　跡地利用のパブリック・ヒストリー：脱工業化後の芸術と遺産
パートVI　困難なパブリック・ヒストリー
二四　政治と記憶：ドイツ人の過去との向き合い方
二五　収集の遺産：ベルギー領コンゴにおける植民地主義的収集と出所に関するベールを剝がす義務
二六　奴隷観光：ガーナの困難な歴史を表象すること
二七　あなたの物語をあなたが理解する方法：カンボジア系アメリカ人虐殺コミュニティーにおける生存の物語
二八　国家の事業のなかで：インドネシアの記念碑と慰霊碑

これら多彩な主題のなかには、日本の歴史学でも、すでに馴染み深いものもあるだろう。パブリック・ヒストリーの主題は、個々の集団や地域、あるいは国などの歴史的背景に大きな影響を受けるが、より抽象化していけば、そのような個別の条件を越えた普遍的主題として共有できる。

実は、これら多岐にわたった主題を、五五〇ページもの紙数を費やして詳述した『オックスフォード・ハンドブック　オブ　パブリック・ヒストリー』をもってしても、パブリック・ヒストリーの全貌を、完全に語り尽くせたわけではない。拡大を続けるパブリック・ヒストリーという沃野を、一冊のテクストで語り尽くすことはかなり困難なのである。本書も、またしかり。その広大な沃野の全域を、

この限られた紙幅で語り尽くせているわけではない。しかし本書は、その沃野を俯瞰する「見取り図」、そしてその沃野へ最初の一歩を踏み出すための「地図」として、歴史に関心をもつ人びとのパブリック・ヒストリー理解に、少しは貢献できるであろう。

本書は、パブリック・ヒストリーの理論面を考察した「I　理論」と、パブリック・ヒストリーの実際例を考察した「II　実践」の二部に大きく分かれている。「I　理論」の部では、パブリック・ヒストリーの発祥の地である欧米におけるパブリック・ヒストリー概念の捉え方や理論、発展史、そしてその可能性と課題をまず解説し（菅豊）、次にその概念を日本に落とし込んだときに生起してくるであろう、近代日本におけるパブリック・ヒストリーをめぐる多様な歴史実践の課題を検討（北條勝貴）、さらにパブリック・ヒストリーの研究・実践とも大きく関わり合う、歴史実践の歴史＝「歴史実践」史を、中世を中心に考察した（中澤克昭）。

パブリック・ヒストリーでは、歴史、および歴史学を「考える（thinking）」だけではなく、何らかの形でそれらを「する（doing）」ことが重視される。そのため、当然、歴史実践（historical practice）という言葉は、パブリック・ヒストリーの重要概念となる。そしてそれは、後述するように、現在の日本の歴史学を考えるにあたってのキーワードにもなっている。

周知の通り、歴史実践という表現が日本で盛んに使われるようになったのは、オーストラリア・アボリジニの歴史実践を研究した保苅実の功績によるものであるが、彼は歴史実践を「日常的実践において歴史とのかかわりをもつ諸行為」［保苅二〇〇四：五〇］と定義し、アボリジニたちと一緒に歴史実践を経験し、そして一緒に「歴史する（doing history）」ことを心懸けた［保苅二〇〇四：六］。パブリック・ヒ

ストリーにおいても、その実践性にもとづいて、同じく「パブリック・ヒストリーをする（doing public history）」という表現が、頻繁になされる。

本書の「Ⅱ　実践」の部では、この「パブリック・ヒストリーをする」ことに注目し、多くの歴史実践の事例を検討した。その実践例は、「歴史家とは誰か？」、「協働」、「オーラル・ヒストリーとライティング・ヒストリー」、「ミュージアムとアーカイブズ」、「デジタル・パブリック・ヒストリー」、「アートと歴史映写」という六つのテーマに分けられている。その歴史実践は、いずれも単なる過去の回顧を目指すのではなく、過去との対話を通じて、現在の現実世界を創造することを目指したものである。

第一のテーマ「歴史家とは誰か？」では、パブリック・ヒストリーにおいて基本的な課題である、歴史学の多様な担い手のあり方について検討した。ここでは、民俗芸能の演じ手であり、さらに歴史学を学んでそれを研究している「歴史家」の歴史実践（俵木悟）や、故郷と勤務先を往復する宗教学者が、故郷の街並み景観保存を通じて「歴史家」となる歴史実践（西村明）、さらに、歴史学の非専門家である「歴史家」たちが、自らの意志で自らの住む地域の歴史を描き、出版する字誌の編纂過程とその歴史意識（市川秀之）に関する論考を取り上げた。それらはいずれも、現代社会における歴史の多様な担い手像を示している。

第二のテーマ「協働」では、パブリック・ヒストリーの最重要コンセプトを取り上げた。協働という実践理念は、実践を行う上で必要不可欠の理念ではあるが、一方でさまざまな問題も抱えている［菅二〇一三：二二八―二三九］。ここでは、昭和二〇年代に若くして亡くなった一人の女性の日記をめぐって展開した、研究者と当事者たちの偶然の協働による、ファミリー・ヒストリーのパブリック化という歴史

実践（宮内泰介）や、東日本大震災後に行われた地域の史料や民俗資料の復旧作業（文化財レスキュー）における、研究者や学生と地域住民などとの協働的な歴史実践（加藤幸治）、さらに日本と韓国の歴史問題をめぐる、分断をも含み込んだ市民協働型の歴史実践（加藤圭木）に関する論考を取り上げた。

第三のテーマ「オーラル・ヒストリーとライティング・ヒストリー」では、パブリック・ヒストリーを読み解き、また発信する際の代表的な手法として重視されてきたオーラル・ヒストリーについて検討した。ここでは、オーラル・ヒストリーによる他者理解と自己理解（石井弓）と、オーラル・ヒストリーを乗り越えるために編み出された、死者へ向けた手紙によるライティング・ヒストリーという歴史実践（金菱清）に関する論考を取り上げた。

第四のテーマ「ミュージアムとアーカイブズ」では、パブリック・ヒストリーを展開する代表的な場として重視されてきた、歴史系博物館やアーカイブズの活動について検討した。ここでは、民間アーカイブズにおける資料保存と地域貢献（西村慎太郎）と、戦災ミュージアムの資料収集・整理と成果発信（小山亮）に関する論考を取り上げた。

第五のテーマ「デジタル・パブリック・ヒストリー」は、現代的なパブリック・ヒストリーの基本的プラットフォームであり、その発展に今後不可欠なデジタル・ヒストリーについて検討した。ここでは、歴史資料のデジタル化などでパブリック・ドメインに置かれた歴史史料が、専門／非専門の垣根を越えて流通・利用される状況の可能性と問題点（後藤真）と、写真のカラー化とデジタル・アーカイブによって可能となった創造的な過去の喚起、すなわち記憶の解凍（渡邉英徳）に関する論考を取り上げた。

第六のテーマ「アートと歴史映写」では、これからのパブリック・ヒストリーの領域を拡大する方法

と活動について検討した。ここでは、戦後・現代の矛盾やタブーを掘り起こしたアートによる歴史実践（飯田高誉）と、歴史家としての映像製作者による映像を媒介にした歴史叙述（青原さとし）に関する論考を取り上げた。

さらに、これらの論考だけでは押さえきれないジャンルに目配りするため、戦国武将家臣団の末裔たちが行う現在の歴史実践（及川祥平）や、自分たちの歴史を記録した古文書を御神体としてコミュニティーで巡回させる地域祭礼（金子祥之）、聖地創出に見る人びとの歴史実践（川田牧人）、民俗文化財保護をめぐる歴史実践（村上忠喜）、祭礼のなかで歴史を刻む音楽の歴史実践（塚原伸治）、歴史実践としての民族文化映像研究所と姫田忠義の活動（今井友樹）といったコラムを配置し、パブリック・ヒストリーの視野を広げている。

これらの論考やコラムで取り上げた主題のほとんどは、世界的なパブリック・ヒストリー研究でも、すでに取り上げられているオーソドックスな主題である。その点で本書は、日本版の『ハンドブックオブ　パブリック・ヒストリー』を目指したものともいえる。ただし本書は、現在、世界で続々と出版されている類書にはない、いくつかの特徴も有している。

たとえば、本書では歴史学分野の専門家だけではなく、多様なジャンル、あるいはディシプリンを背景にもつ専門家たちが、その歴史実践を披瀝している。当然ではあるが、「歴史」は、歴史学の独占物ではない。歴史学のみならず、多くの学問にとっても共通課題であり、歴史学の専門家以外も、多種多様な歴史実践に携わっている。後述するように、これまで海外で蓄積されてきたパブリック・ヒストリー研究では、それを展開するにあたって、多様な専門分野のバックグラウンドをもつ専門家たちが寄

り集い、その知識や技術を結集することが肝要とされてきた。しかし実際は、パブリック・ヒストリー関係書籍の書き手は、歴史学プロパーにいささか偏ってきたという嫌いがある。

かつて阿部謹也が、網野善彦との対談のなかで、近代の学問が細分化してきたこと自体が、近代社会の孕む問題を反映していると述べ、「生活そのものの中で、各専門領域を区別して暮らしていない以上、学問のなかでも専門領域の枠を取り払うというか、意識しないのが自然ではないかと思うのです」［網野・阿部 一九八二：二六七―二六八］と吐露したように、まさに普通の人びとが生きる世界での歴史実践を問題とするパブリック・ヒストリーの現場では、学際的という以上の、より脱領域的な叡智を結集するのが自然なはずだ。歴史学の専門知と経験はもとより、それ以外の多様な専門知と経験を、パブリック・ヒストリーにフィードバックすることが必須である。そのため本書の執筆陣は、歴史学の専門家をはじめとして、民俗学、社会学、文化人類学、宗教学、さらにアートや映像制作などの専門家といった、実に多彩な顔ぶれとなった。彼ら彼女らは、すべてが等しく「パブリック・ヒストリアン」なのである。そしてパブリック・ヒストリーは歴史学のみならず、民俗学、社会学、文化人類学、宗教学……いや、すべての人文・社会科学にまたがる「入会地＝コモンズ」なのである。

紹介した歴史実践例は、すべてではないもののその多くが、これらの多様なバックグラウンドをもつ専門家たち自身が直接関わったものである。もちろん、その関わりの深度には違いはあり、また個人的に関わったものもあれば、所属している機関として関わったもの、そして地域の人びとと一緒に関わったものもある。しかしその多くが、自ら何らかの関わりもつ、アクチュアルな歴史実践であることに間違いはない。その状況を、執筆者たちは実践主体として解説するだけではなく、再帰的、自己言及的にと

らえ直してくれた。それは具体的な歴史実践の場において、その研究者自らを含めて題材化し、自覚的、再帰的に観察、考察する「歴史実践の内省的エスノグラフィー」としても、読み込むことが可能である。この点も、本書の特徴のひとつといえよう。

現代社会において、歴史の重要性は恐ろしいほどに弥増すばかりである。いま私たちが生きている世界で生起している深刻な諸問題は、そのすべてが歴史的課題として扱うことが可能であるといっても過言ではない。そのようななか、パブリック・ヒストリーの存在感は、今後さらに増大していくことだろう。パブリック・ヒストリーという言葉やその意味内容が人口に膾炙するまでに、まだいましばらく時間を要しそうな日本において、本書がその研究と実践の一端を示し、今後、日本でも擡頭するであろうパブリック・ヒストリーの口火を切ることができれば幸いである。

引用・参考文献

網野善彦・阿部謹也 一九八二『対談 中世の再発見――市・贈与・宴会』（平凡社）
カー、E・H 一九六二『歴史とは何か』（岩波書店）
菅　豊 二〇一三『「新しい野の学問」の時代へ――知識生産と社会実践をつなぐために』（岩波書店）
保苅　実 二〇〇四『ラディカル・オーラル・ヒストリー――オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』（御茶の水書房）
Gardner, James B. and Paula Hamilton eds. 2017 *The Oxford Handbook of Public History*. New York: Oxford University Press.

編者略歴

菅　豊（すが・ゆたか）

1963年生まれ。東京大学大学院情報学環・学際情報学府、東洋文化研究所教授。
専門は民俗学。
著書に『川は誰のものか―人と環境の民俗学』（吉川弘文館、2006年）、『人と動物の日本史3―動物と現代社会』（編著、吉川弘文館、2009年）、『「新しい野の学問」の時代へ―知識生産と社会実践をつなぐために』（岩波書店、2013年）などがある。

北條勝貴（ほうじょう・かつたか）

1970年生まれ。上智大学文学部教授。
専門は東アジア環境文化史。
著書に『環境と心性の文化史』上・下（共編著、勉誠出版、2003年）、『寺院縁起の古層―注釈と研究』（共編著、法蔵館、2015年）、『歴史を学ぶ人々のために―現在をどう生きるか』（共著、岩波書店、2017年）などがある。

パブリック・ヒストリー入門（にゅうもん）
――開かれた歴史学への挑戦

編者　菅　豊
　　北條勝貴

発行者　池嶋洋次
発行所　勉誠出版㈱
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町三-一〇-二
電話　〇三-五二一一-九〇二一㈹

二〇一九年十月二十五日　初版発行

印刷・製本　中央精版印刷

ISBN978-4-585-22254-5　C1021